SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

中学校技術・家庭科家庭分野における「幼児の間食」に関する学習内容の検討：「手作り志向」を手掛かりとして

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学学術院教育学領域 公開日: 2021-01-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 冬木, 春子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00027853

中学校技術・家庭科家庭分野における「幼児の間食」に関する学習内容の検討

ー「手作り志向」を手掛かりとしてー

A Study on the Subject “Snacks for Toddlers” from the Middle School Home Economics Class Considering “Homemade Preferences ”

冬木　春子[1]
Haruko Fuyuki

（令和 2 年 11 月 30 日受理）

ABSTRACT
In this article, I aimed to evaluate the subject “snacks for toddlers” form the middle school home economics class by analyzing the text books and data on toddlers’ snack consumption.
I analyzed six home economics’ textbooks on the subject of toddlers’ snacks and found that with the increasing preference for homemade snacks, the number of snack recipes and ingredients included is higher in the decent textbooks than in the earlier ones. However, 80 percent of parents who took survey on their toddler’s snack consumption responded that they prepare homemade snacks only on special occasions, or rarely. This survey result reveals a discrepancy between reality and the concept in the textbooks.
This article presented the importance of education in nurturing scientific knowledge required to make informed decisions about the kind of snacks that toddlers can be given. In addition, the article also argues for the original perspective of the practicality of learning about homemade snacks. Considering the possibilities of pandemics (such as COVID-19) and the recent increase in natural disaster, it is important to be prepared for emergencies when there is danger to our daily lives and not depend completely on off-the-shelf product.

1. 問題意識と目的

共働き世帯の増加を背景として、「家事労働の社会化」が進んでいる。伊藤（2008）によると、「家事労働の社会化」とは、生活手段財を商品として家庭に取り込むことだけを意味するのではなく、家事、育児・教育、介護・世話等の家庭生活における私的な対人サービス機能が社会的な労働に代替されることも意味しており、「生活の社会化」とも言い換えられる。

食生活に注目すると、近年では購入した惣菜などの中食食品の普及に加えて、一部の調理過程を外部化することができるカット野菜や冷凍野菜などの簡便化商品の伸長が指摘されている（大浦他　2018）。特に、若い世代は「食の外部化」に組み込まれる中で、「購入することが当たり前で、作ることが特別なこととなっている」とも言われている（佐藤　2018）。

---

[1] 家政教育系列

このように「食生活の社会化」が進む一方で、人々の健康に対する意識も向上しており、「食の手作り」に対する価値も上昇している（日本経済新聞社　2006）。2000 年以降には「バレンタインデーの手作りチョコブーム」が起きるなど、社会一般にも「手作りを礼賛する風潮」が見出されている（表　2012）。このことは「食生活の社会化」が進展する一方で、「手作り」に付加価値を見出す志向性が高まり、「手作り」に対する憧憬がより強く抱かれるようになっているとも想定される。

このような食の「手作り志向」に注目し、幼児食の一つである「間食・おやつ・菓子」に関する内容が家庭科教育においてどのように位置づけられ、教えられてきたのかを分析しているのが表（2012）である。表（2012）は、明治、大正、昭和、平成に発行された中学校及び高等学校の家庭科教科書についての分析を行っている。それによると、戦前期の間食は、日常的にお握りや蒸甘藷といったものであり、大正期に普及したカステラやビスケット、あられ、昭和にかけてキャラメル、チョコレートなど市販の菓子類は、一般庶民にとって高級品だったと述べられている。一方、比較的裕福な子女を対象に教育した大正・昭和前期の家事科教科書においては、そのような市販の菓子類を用いることが提唱され、1970 年代前半までこの傾向が続いていたという。その後、食品工業が発達して市販の菓子が多く販売されるようになり、いゆわる「スナック菓子」が普及する 1980 年代以降は、市販品を用いる弊害への警鐘が盛んに行われ、「手作り」のよさが提唱されるようになったとされる。中学校の技術・家庭科家庭分野の教科書においては、2002 年以降の教科書に「手作り志向」が高まる傾向にあり、教科書には「手作り」が当たり前だった時代のお握りや蒸甘藷など手作りが容易なものではなく、手間のかかる洋菓子が多く取り上げられていると述べられている。

一方、表による研究は 2012（平成 24）年以前に発行された K 社の教科書のみを分析対象としているが、幼児の間食における現代的課題を明らかにするためには、2012 年以降に発行された K 社以外の教科書をも分析対象とする必要があろう。また、「幼児の間食」を家庭科の授業において取り上げる際に、その前提となる幼児の間食に関する実態調査をふまえて、本題材を多様な観点から捉え直す試みは管見の限りにおいて行われていない[注1)]。

そこで本研究の目的は、現行の中学校技術・家庭科家庭分野の教科書において、「幼児の間食」に関する記述を分析し、家庭科教育において取り上げられるべき視点を明らかにする。これをふまえ、幼児の間食の摂取と「手作り志向」をめぐる実態から現代的課題を明らにすることで、中学校技術・家庭科家庭分野における「幼児の間食」に関する学習内容の検討を行うことにしたい。

2. 研究方法

（1）中学校技術・家庭科家庭分野の教科書に記載された「幼児の間食」に関する分析

2017 年に告示された新学習指導要領は中学校では 2021 年度に全面実施される。したがって、現行の教科書は、2008 年に告示された中学校学習指導要領に基づいたものであり、開隆堂、教育図書、東京書籍の 3 社が発行した 3 冊である。そこで本研究では、平成 31 年（2019 年）及び平成 24 年（2012 年）に 3 社により発行された中学校技術・家庭科家庭分野の教科書 6 冊を分析対象とする（表 1）。具体的には、家庭科教科書「家族・家庭と子どもの成長」の内容において、「幼児の間食」に関する記述を抽出し、内容ごとに分析を行う。

表 1　分析対象とした教科書

番号	発行年度	出版社	書名
1	平成 24 年度	開隆堂	技術・家庭　家庭分野
2	平成 31 年度	開隆堂	技術・家庭　家庭分野
3	平成 24 年度	教育図書	技術・家庭　家庭分野
4	平成 31 年度	教育図書	新技術・家庭　家庭分野
5	平成 24 年度	東京書籍	新しい技術・家庭　家庭分野
6	平成 31 年度	東京書籍	新しい技術・家庭　家庭分野

(2) 幼児の間食摂取の実態調査

幼児の間食摂取の実態は、平成 29 年 8 月及び 9 月に、S 市の保健福祉センターにおいて乳幼児健診受診者を対象に行った質問紙調査のデータ分析によるものである。調査内容は「昨日、食べた間食と時間」「間食の意味づけ」「手作りの間食」等について、山田他（2016）、桧垣（2017）の調査を参考に質問を作成し、分析を行った。

調査対象者は、1 歳半健診受診者 112 人、3 歳児健診受診者 99 人の計 211 人であるが、回答者を母親に限定したため、分析対象は 205 人である。母親の年齢は 30 代が 146 人（71.2%）で最も多く、40 代が 34 人（16.6%）、20 代が 22 人（10.7%）である。母親の就業形態では、専業母親が 118 人（57.6%）、正規職員が 51 人（24.9%）、パートタイム就労が 24 人（11.7%）、自営 6 人（2.9%）である[注2)]。

3. 結果

(1) 中学校技術・家庭科家庭分野の教科書における「幼児の間食」についての記述分析

家庭科教科書の記述を整理したところ、「幼児の体の特徴と間食」「間食の機能」「幼児の生活と間食」「間食の与え方についての注意事項（安全性、食物アレルギー）」「幼児の間食の例と作り方」の観点に分けられると判断した。この観点からすべての教科書の記述の整理を行った（表 2）。

すべての教科書において、幼児の体の特徴と間食の必要性を結びつける記述が見られている。たとえば、教科書 1 では「幼児期は、消化機能の発達に合わせて、食事の量や内容も変化すること」が記述されている。また、教科書 3 及び 4 では「幼児期は、発育、発達がさかんで、活動量も多いため、十分なエネルギーと栄養素が必要」との説明がなされ、「おやつは食事の一部として重要です」と記述されている。このように、幼児の間食の必要性を体の特徴と結びつけて、科学的に理解することを意図している記述が多い。教科書 2 においては、幼児の手づかみ食べを説明し、間食と手の巧緻性との関連や「食べる意欲」に結びつけている。

さらに、教科書 3 及び 4 では「幼児期には、早寝、早起き、決まった時間の食事、おやつ、昼寝など、規則正しい生活リズムを整えることが重要です」と記載されており、幼児期の生活リズムを整える要素として、睡眠や食事に加えて間食の位置づけを明確化している。これは新学習指導要領においても重視されている事項である。

「間食の機能」について、表（2012）は「休息や気分転換、楽しみという心理的機能」「栄養補給という生理的機能」「コミュニケーションの媒介となる社会・教育的機能」「和菓子・伝統

表２　中学校技術・家庭科家庭分野の教科書における「幼児の間食」についての記述分析

教科書	項目	幼児の間食の説明
1	体の特徴と間食	「参考」 幼児期は、消化機能の発達に合わせて、食事の量や内容も変化していきます。幼児は胃が小さいので、おやつは食事の一部として重要です。(p.36)
	間食の機能	「参考」とのリンク「発展」 学校から家に帰って休息したり、気分転換したりするためのおやつは、食生活にいろどりを添え、いっしょに食べる人との会話もはずませます。(p.132)
	安全性	「方法２　幼児を学校に招待しよう」 例２　いっしょにおやつを作って食べよう 子供の体の大きさをよく理解して、道具や熱源の位置に注意しましょう（p.52）。
	例・作り方	「発展」チョコチップクッキー・いももち・牛乳かん・カップケーキ・グミキャンディー（p. 132 – 133） 「生活の課題と実践Ａ　課題５」とうふだんご・せんべいとゆでとうもろこし・プチお好み焼き（p. 243）
2	体の特徴と間食の機能	「探究　幼児の衣服と食べ方の特徴」 手づかみで食べたり、食べこぼしがあっても、自分で食べようとする気持ち、楽しく食べられる雰囲気を大切にします。 リンク　「手を使ってやってみよう」(p.30) 幼児にとっておやつは食事の一部です。おとなにとっては、休息や気分転換でもあるおやつが、幼児の場合には、栄養補給の役割も果たします。(p.31) 「探究　おやつやデザートをつくろう」 　おやつは、食生活にいろどりを添え、一緒に食べる人との会話もはずませます。また、幼児にとっては栄養補給として、食事の一部にもなり、必要なものです。(p.128)
	例・作り方	プチお好み焼き・ブラマンジェ・果物・プチケーキ（p. 30 – 31） [伝統文化]いももち・関東風桜もち・わらびもち、牛乳かん・こはくかん・フルーツゼリー、カップケーキ、チョコクッキー、プチお好み焼き、プリン、プチケーキ、スイートポテト（p. 128 – 129）
3	生活と間食	1 日 1 ～2 回、時間や量を決めてあげる。（p.37）
	体の特徴と間食の機能	幼児期は、発育、発達がさかんで、活動量も多いため、十分なエネルギーと栄養素が必要です。そのため、1 日 3 回の食事ではとりきれない栄養素や水分を、おやつで補います。幼児のおやつは、食事の一部と考え、消化が良く、かむ力に合っていて、楽しく食べられるものを用意します。水分補給のために、飲み物も一緒に用意しましょう。（p.37）
	安全性	「コラム」こんにゃく入りゼリーの表示（警告マーク）(p.37)
	食物アレルギー	「卵アレルギーの子でも食べられる」卵を使わないホットケーキの例・作り方（p.38）
	例・作り方	蒸しパン・果物・牛乳かん(p.37) あべかわ風マカロニ・さついまものオレンジ煮・卵を使わないホットケーキ・りんご入りホットケーキ(p.38)

4	生活と間食	1日1～2回、時間や量を決めて与える。（p.37）
	体の特徴と間食の機能	幼児期は、発育、発達がさかんで、活動量も多いため、十分なエネルギーと栄養素が必要です。そのため、1日3回の食事ではとりきれない栄養素や水分を、おやつで補います。幼児のおやつは、食事の一部と考え、消化が良く、かむ力に合っていて、楽しく食べられるものを用意します。水分補給のために、飲み物も一緒に用意しましょう。（p.37）
	安全性	こんにゃく入りゼリーの表示（警告マーク）(p.37)
	食物アレルギー	食物アレルギーを持つ幼児もいるので、十分に配慮しましょう。(p.38)
	例・作り方	蒸しパン・果物・牛乳かん(p.37) フルーツ寒天ゼリー・スイートパンプキン・さつまいものジュース煮・スイートポテト・大学いも・ふかしいも・いきなり団子（熊本県の郷土料理）(p.38)
5	体の特徴と間食の機能	胃が小さく、一度にたくさん食べることができない幼児にとって、おやつは大切なものです。幼児にとって、大きな楽しみでもあるので、おやつを用意するときには、幼児が楽しめる工夫をしましょう。（p.181）
	生活と間食	幼児と中学生の生活時間の例にみるおやつの回数と時間（p.180）
	例・作り方 献立例	「わたしたちの成長と家族・地域の課題と実践　幼児のためのおやつを作ろう」パプリカ入りパンケーキ・地元の旬の野菜を使ったお好み焼き（図）（p. 244 – 245）
6	体の特徴と間食の機能	幼児は3回の食事以外におやつを食べています。胃が小さく、一度にたくさん食べることができない幼児にとって、おやつは食事の一部として大切なものです。幼児にとって、おやつは大きな楽しみでもあるので、用意するときには、栄養のバランスを考えるとともに、幼児が楽しめる工夫をしましょう。（p.193） 「資料　幼児のおやつ」幼児のおやつには、朝食、昼食、夕食ではとりきれない栄養を補う大切な役割があります。食事とは違った楽しみとして、わくわくする飾り付けをしたり、甘さを抑えた菓子を取り入れたりするとよいでしょう（p.198）。
	生活と間食	幼児と中学生の生活時間の例にみるおやつの回数と時間（p.192）
	食物アレルギー	幼児のおやつを考えるときには、アレルギーにも配慮する必要があります。
	例・作り方	焼きそば・ミニおにぎり・ピザトースト・豆腐のパンケーキ・オレンジのクラッシュゼリー・スイートポテト（p.198-199） 「わたしたちの成長と家族・地域の課題と実践　幼児のためのおやつを作ろう-野菜入りおやつ-」ピーマン入りパンケーキ、ほうれん草入りカップケーキ（絵）（p.260）

菓子などの食文化の創造と継承を行う文化的機能」に分けている。本稿においてもこの分類から教科書の記述を検討したところ、すべての教科書において「幼児にとっておやつは楽しみ」という心理的機能が言及されており、「おやつは食事の一部」であり「栄養補給の役割がある」

という生理的機能も言及されていることがわかる。一方、教科書 1 及び 2 については、「おやつは一緒に食べる人との会話もはずませます」と社会・文化的機能についての説明がなされている。「文化的機能」については、教科書 2 では「伝統文化」として「関東風桜もち」「いももち」の例、教科書 4 では「いきなり団子」（熊本県の郷土料理）の例が紹介されている。また、教科書 5 及び 6 では、「幼児のためのおやつ作り」として、地元の野菜を使ったおやつ作りを提案している。全体として、平成 31 年版においては、「和菓子・伝統菓子」「地域で取れる食材」など、食文化の創造と継承を行う文化的機能を意図している教科書が多いのが特徴である。さらに、幼児に間食を与える際の注意事項として、平成 31 年版になると「食物アレルギー」に言及する記載が増えている。

幼児の間食に関しての写真及び図からなる間食例や材料や作り方の提示では、教科書 1 では間食例は 4、作り方の提示数は 5 であるが、教科書 2 では間食例は 8、作り方の提示数は 8 と増加していた。教科書 2 において、食物分野の「おやつやデザートをつくろう」のページには、教科書 1 に記載された「いももち」「牛乳かん」「カップケーキ」に加えて、新たに「わらびもち」「スイートポテト」「プリン」などの作り方と写真が提示されている。

教科書 3 においても、間食例は 4、作り方の提示数は 4 であるが、教科書 4 になると、作り方の提示数は 3 であるが、間食例は 7 となり、「さつまいものおやつ」として「スイートポテト」「大学いも」「ふかしいも」「いきなり団子」の写真が紹介されている。

また教科書 5 では、「わたしたちの成長と家族・地域」の課題と実践において「幼児の間食作り」が課題として提示され、「パプリカ入りパンケーキ」の作り方や「地元の旬の野菜を使ったお好み焼き」の例が記載されている。教科書 6 になると、特に間食の作り方の提示数が大幅に増加し、「資料幼児のおやつ」のページに「焼きそば」「ミニおにぎり」「ピザトースト」「オレンジのクラッシュゼリー」「豆腐のパンケーキ」「スイートポテト」の作り方と写真が提示されている。

このように、平成 24 年と平成 31 年に発行された各教科書を比べると、すべての教科書において、間食例や作り方の提示数が増加しており、幼児の間食についての「手作り志向性」の強まりが指摘できる。学習指導要領では「幼児のための間食を作ること」が継続して取り上げられているが、本研究においては、2012（平成 24）年よりも 2019 年（平成 31 年）発行の全教科書において、「手作り志向性」を強めていることが明らかにされた。

(2)「幼児の間食」に関する実態調査

ここでは、「幼児の間食」を授業で取り上げる際の前提となる「幼児の間食」に関する実態を質問紙調査によるデータから見ていくことにする。

a　幼児の年齢別にみる間食内容

図 1 は幼児が自宅で食べた間食について自由回答形式にて尋ねたものを、年齢別（1 歳及び 3 歳）で比較している。

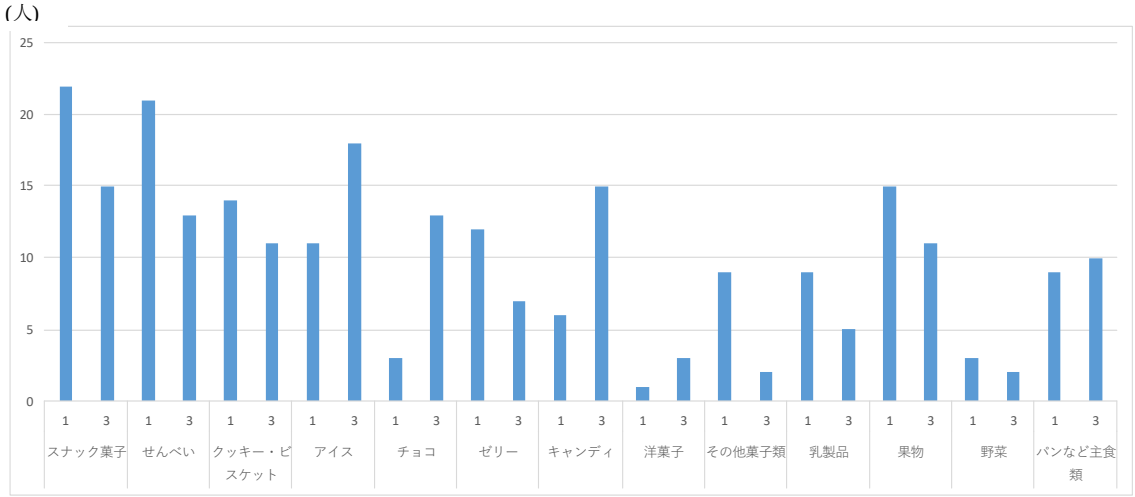


図 1　幼児の年齢別にみる間食内容

1 歳では「スナック菓子」が 22 人で最も多く、1 歳児の 20.4%を占めている。次に多いのが、「せんべい」が 21 人（19.4%）、「果物」15 人（13.9%）、「クッキー」14 人（13.0%）、「アイス（アイスキャンディー・アイスクリーム）」11 人（10.2%）となっている。３歳になると「アイス」18 人（18.6%）が最も多く、「スナック菓子」「キャンディ」がそれぞれ 15 人（15.5%）となっている。３歳児になると「チョコ」13 人（13.4%）や「ゼリー」12 人（11.1%）の摂取が増えているのが特徴である。

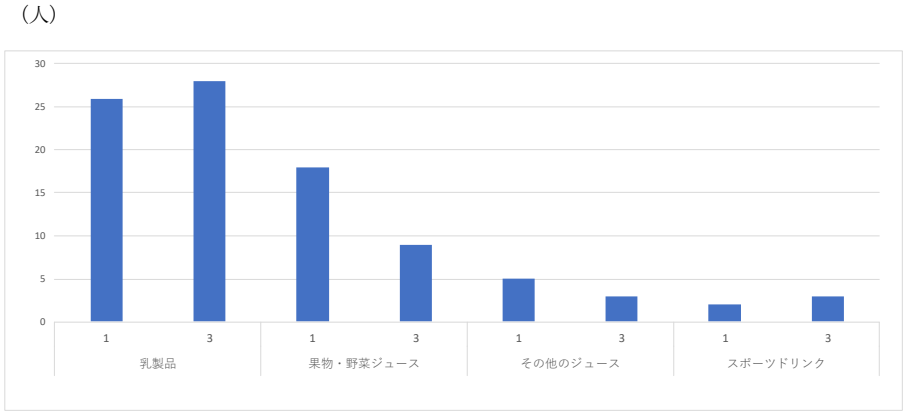


図 2　幼児の年齢別にみる間食（水・お茶を除く飲み物）

図 2 では間食時の水分補給として、水やお茶を除く飲み物を摂取しているかを示している。乳製品の摂取は 1 歳児で 26 人（24.1%）、3 歳児で 28 人（28.9%）と最も多いが、「果物・野菜ジュース」では 1 歳児が 18 人（16.7%）と 3 歳児の 9 人（9.3%）よりも多い。また、少数であるが「その他のジュース」や「スポーツドリンク」を摂取している幼児もいる。

図3は、間食の選択主体について示している。1歳児では親が間食を選んでいるのは9人（86%）であるが、3 歳児では間食の選択者として「親」が 62 人（65.3%）と減少し、代わりに「子ども」が 26 人（27.4%）と増加している。発達的にみると、子どもは 1 歳半で自我が芽生え、拡大し、3 歳児では自己主張が強くなり、言葉を使ってのコミュニケーションも上手になるとされる。そのような発達の力を土台に、3 歳になると間食を選ぶ際に自らの要求として「チョコ

レート」や「キャンディ」を選ぶ割合が増えると考えられる。

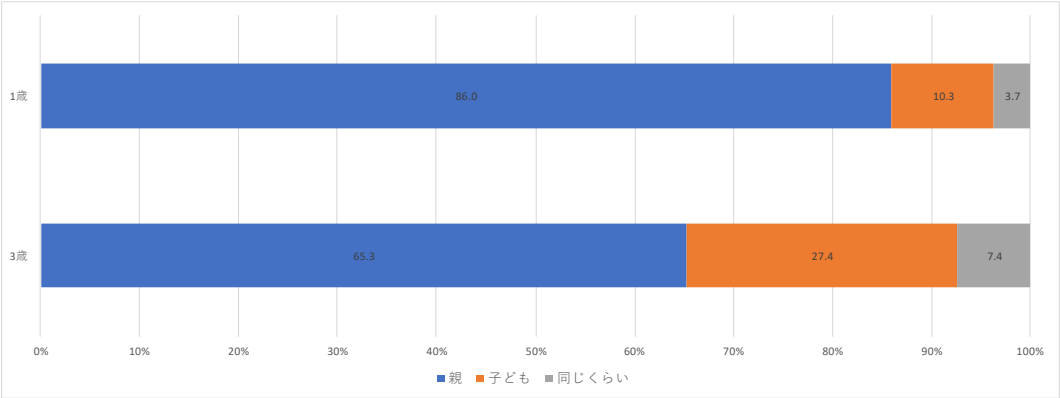


図 3　間食の選択主体

b　手作りの間食について

図 4 は手作りの間食の必要性について尋ねた結果である。図が示すように、手作りの間食の必要性を認識している母親は 170 人（83.7%）を占めており、必要性を認識していない母親は 27 人（13.3%）である。

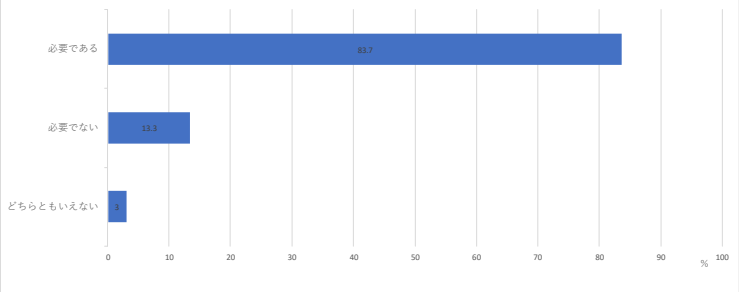


図 4　手作りの間食の必要性

次に図 5 では、手作りの間食を作る頻度を尋ねた。「ほぼ毎日」は 8 人（3.9%）と最も少なく、「時々」95 人（46.6%）、「特別な日のみ」75 人（36.8%）、「与えたことがない」26 人（12.7%）であった。このことから、母親の 8 割は手作りの間食の必要性を認識しているが、実際には、時間の余裕がある時や特別な記念日に手作りの間食を作っていると言える。

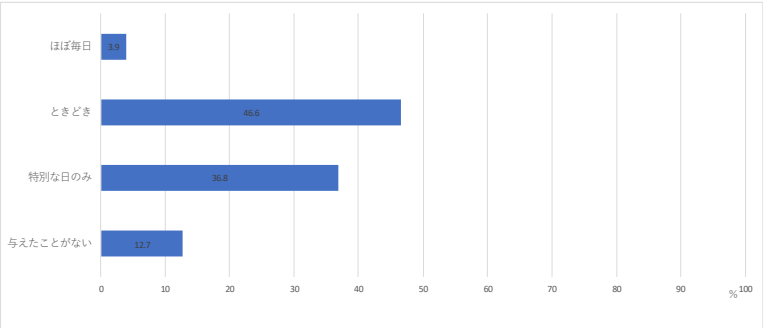
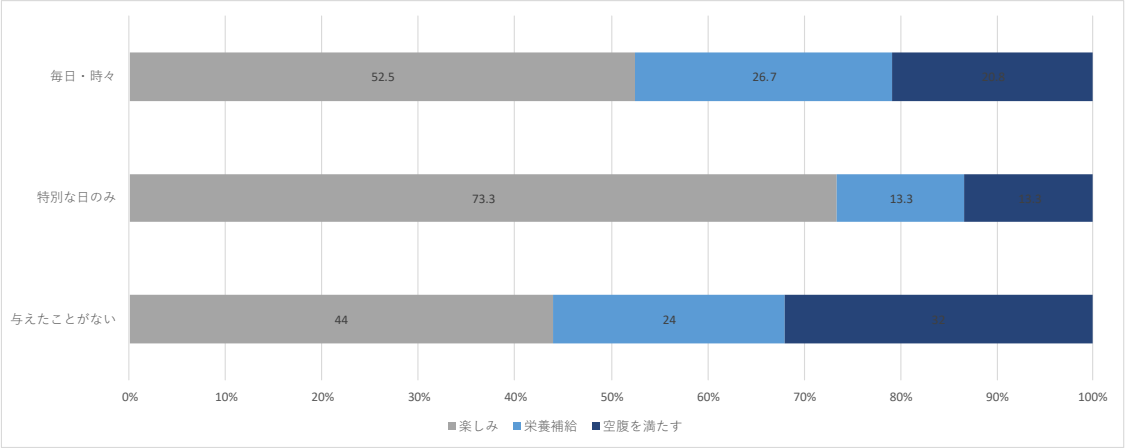


図 5　手作りの間食を作る頻度



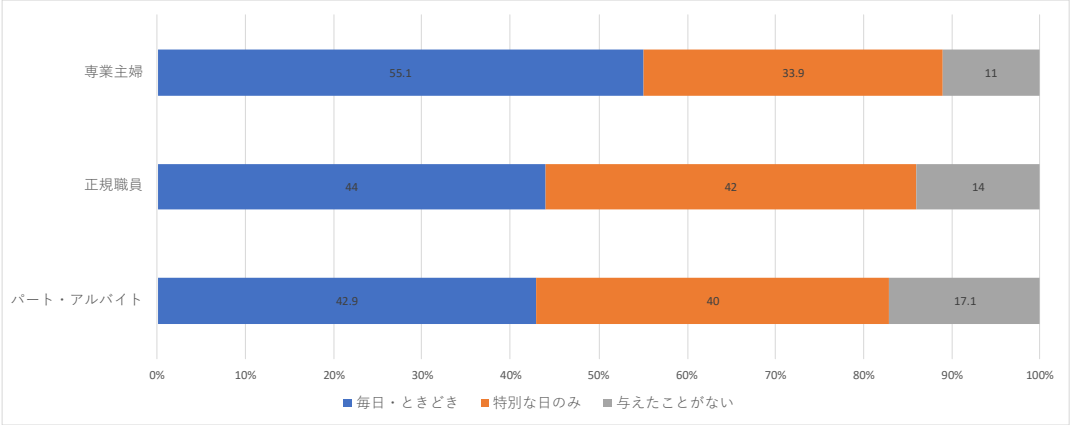
$\chi^2(4)$ =11.55, P＜.021

図 6 手作りの間食を作る頻度と間食意義の認識

図 6 は手作りの間食を作る頻度と間食の意義に関する認識との関連を検討したものである。間食の意義としては「子どもの楽しみのため」「栄養を補給するため」「空腹を満たすため」を設定している。図 6 が示すように、「間食の意義」を「子どもの楽しみ」という心理的な充足や家族とのコミュニケーションを育てることに見出す親が多い。中でも、手作りの間食を「特別な日」に作る親は特にその傾向が強い。一方、手作りの間食を作る頻度が最も高い親（「毎日・時々」）は、間食に「3 度の食事で補えない栄養を補給する」という意味づけを与えている人が相対的に多い。そして、手作りの間食を一度も与えたことがない親は、間食を「空腹を満たす」という意味づけを与えている人が多いことがわかる。

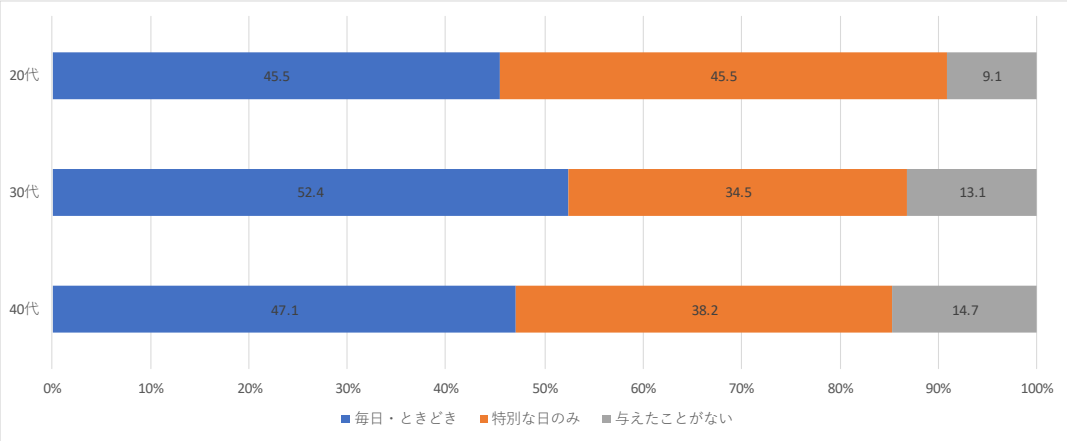
次に、母親の就業形態と「手作りの間食を作る頻度」との関連を示している（図 7）。専業母親では、手作りの間食を「毎日・時々」作る人が 55.1%（65 人）で相対的に多く、「一度も作ったことがない」人は 11.0%（13 人）と少ないが、統計的な有意差は認められていない。したがって、母親の就業形態によって手作りの間食を作る頻度には差がないことから、母親の「時間的余裕」は手作りの間食を作る頻度には影響しないと言える。

次に、「手作りの間食を作る頻度」さらには「手作りの間食の必要性」と母親の年齢との関連を示したのが図 8 及び図 9 である。結果では、母親の年齢と手作りの間食を作る頻度は関連がないものの、母親の年齢と手作りの間食を作る必要性については有意な関連傾向が認められた。すなわち、40 代の母親は手作りの間食の必要性認識を強く感じているが、20 代あるいは 30 代の母親では、手作りの間食の必要性は認識していない人が 20%程度存在している。このことは、母親の年齢が若いほど、食生活の社会化を肯定的に捉える傾向にあるとも考えられ、今後は「手作り」の間食に価値を見出さない人も増えてくる可能性も否定できない。



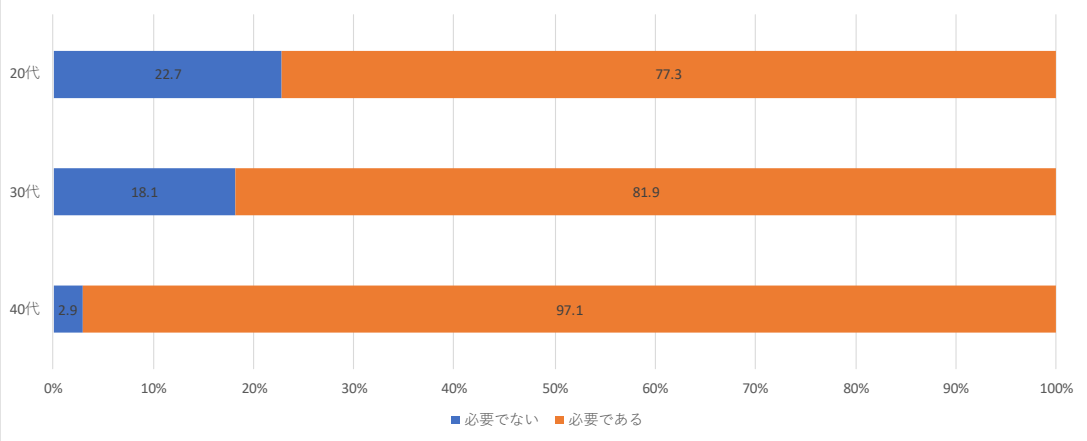
$\chi^2(4)=2.91$　$P>.10$

図７　母親の就業形態と間食を手作りする頻度



$\chi^2(4)=1.30$　$P>.10$

図８　母親の年齢と間食を手作りする頻度



$\chi^2(4)=5.51$　$P<.10$

図９　母親の年齢と間食を手作りする必要性の認識

4 総合考察

中学校技術・家庭科家庭分野の教科書において、「幼児の間食」に関する記述を分析したところ、近年の傾向として「手作り志向」が高まっており、幼児の間食についての写真及び図で示した間食例や材料、作り方の提示数が近年になるほど増えていることが示された。このような「手作り志向」の高まりにもかかわらず、幼児の保護者を対象とした調査結果からは、1 歳児の間食では「スナック菓子」「せんべい」が最も多く、3 歳になると「アイス（アイスキャンディー・アイスクリーム）」「スナック菓子」「キャンディ」「チョコレート」を摂取する子どもが多いことが明らかになった。「果物」や「野菜」を摂取する子どもは 1 歳児が 3 歳児よりも多く、3 歳になると間食の選択に子どもの意見が反映されることも増えることから、塩分や油が多く含まれる「スナック菓子」、着色料などの添加物が多く含まれる「アイス（アイスキャンディー・アイスクリーム）」が選択される機会も増えることが考えられる。

子どもの間食を手作りする頻度については、「ほぼ毎日」手作りしている母親は約 4%である。手作りの間食は「時々」あるいは「特別な日」に作る母親が約 80%を占めることから、手作りの間食の必要性を認識しているものの、実際に幼児が食べる間食は市販されたものが多いと言えるであろう。

手作りの間食を作る頻度と母親の就業形態との関連では、専業主婦（母親）は「毎日・時々」手作りの間食を作っている人が約 55%と最も多かったものの、正規職員及びパート・アルバイトの母親でも「毎日・時々」手作りをしている母親は約 40～45％であった。両変数の間に統計的に有意な関連は認められなかったことから、母親の仕事の有無、すなわち「時間的余裕」と手作りの間食を作る頻度は関連がないと言える[注3)]。

一方､母親による幼児の間食の意味づけと手作りの間食を作る頻度との関連性は認められた。すなわち、幼児の間食を「栄養の補給」として捉えている人は間食を手作りする頻度は高く、幼児の間食を「心理的な充足」として捉えている人は、間食を「特別な日」に作る傾向が強い。一方、幼児の間食を「空腹を満たす」と意味づけている場合は、間食の手作りはしないようである。したがって、「手作りの間食」を作るかどうかは、母親の「時間的余裕」ではなく、むしろ母親による幼児の間食の意義の捉え方と関連すると言えるであろう。

中学校技術・家庭科家庭分野の教科書において、幼児の間食についての作り方の提示数が増え、「手作り志向」が高まっていることは、幼児の間食の実態と照らし合わせると乖離があると言えよう。すなわち、幼児の日常の間食は市販品が一般的である一方で、中学校家庭科における「幼児の間食」において市販の間食についての取り扱いがないことは、「間食は手作りするべき」という理念が先行しているとも捉えられる。これは、「手作りの間食」に「母親の愛情」や「母親らしさ」を見出そうとする「良妻賢母」主義的教育の名残とも捉えられよう。

今日の社会的分業が高度に発達した社会においては、生活者としての人は皆既製品の消費者・購買者であらざるを得ないことをふまえるならば、自らの購買する製品の特性や品質に対するリテラシーが不可欠である。家庭科教育はそのような要請に対応することが必要であり、「幼児の間食」という題材においても、幼児が食べる間食を購入するにあたっての科学的なリテラシーを育てる教育が必要であろう。平成 24 年発行の教科書（東京書籍）では、消費生活の内容「商品の選択と購入」において「次の商品を購入するとき、どんなポイントを重視して購入するか考えましょう」との問いかけにおいて、「菓子」が購入商品の一例として取り上げられている。この問いかけは平成 28 年発行の教科書では削除されているが、幼児の食べる間食を購

入するあたっての科学的なリテラシーを育てる教材は必要と言えるであろう。

一方で、新型コロナ感染症のようなパンデミックや気候変動の進展によって多発が予測される気候災害や、発生が想定されている巨大地震のような日常生活を危機に陥れる非常事態に備えておくという必要性も考えると、必ずしも既製品に全面的に依存しなくても済む生活技術を学んでおくということも生活者にとって必要事であろう。すなわち、いわゆる「手作り」の間食について学ぶということにも独自の意義が見出されるのではないだろうか。

保育教育という視点からは、子どもが間食を作るプロセスに焦点を当て、そこに子どもたちの育ちを見るという視点も必要であろう。たとえば、田口（2019）による保育所での「お月見団子づくり」の実践によると、幼児が仲間で協力して団子づくりを行うことで協同性が育っていくこと、団子を茹でる煙のにおいをかいで想像をめぐらしたり、茹でた団子の数とそれをすくう順番を数えることで、数に対するリテラシーが高まっていくこと、探究心や創意工夫の力が育まれたことを報告している。すなわち、幼児自らが間食を作るプロセスにおいて、幼児が他者と共に豊かに成長するのである。このような子どもに対するまなざしと共感的な姿勢を育て、自らも共に育つ保育教育こそ、家庭科教育では求められているのである。

5　まとめと今後の課題

本稿では、食生活における社会化の進展と「手作り志向」への高まりという昨今の状況において、中学校技術・家庭科家庭分野における「幼児の間食」の学習内容を検討した。方法としては、中学校家庭科の教科書の記述分析を行い、幼児の間食摂取の実態調査を行った。

中学校技術・家庭科家庭分野の 3 社による教科書 6 冊の記述分析では、幼児の間食について「幼児の体の特徴と間食」「間食の機能」「幼児の生活と間食」「間食の与え方についての注意事項（安全性、食物アレルギー）」「幼児の間食の例と作り方」の観点に分けられた。その観点において、一日の生活リズムにおける間食の位置づけとその明確化、「和菓子・伝統菓子」等の食文化の創造と継承を意図は新学習指導要領でも重視されていることから、新しい教科書でも扱いが増えることが予想される。また、幼児の間食についての材料や作り方の提示数が近年になるほど増えていることから、近年の傾向として教科書における間食の「手作り志向」は高まっていることが示された。

幼児の保護者を対象とした幼児の間食摂取の実態調査では、1 歳児の間食は「スナック菓子」「せんべい」が最も多く、3 歳になると「アイス（アイスキャンディー・アイスクリーム）」「スナック菓子」「キャンディ」「チョコレート」を摂取する子どもが多くなっていた。また、子どもの間食を手作りする頻度については「時々」あるいは「特別な日」と答えた母親が約 80%を占めており、日常的に幼児が食べる間食は市販されたものが多いことが示された。このことから、中学校家庭科において、幼児の間食に市販品の取り扱いがないことは、「間食は手作りするべき」という理念が先行しており、実態と教科書の理念との間に乖離があると考えられる。

本稿では、中学校技術・家庭科家庭分野における「幼児の間食」の学習内容として、幼児が食べる間食を購入するにあたっての科学的リテラシーを育てる教育が重要であることを指摘した。また、幼児が間食を作るプロセスに注目することで、幼児が他者と共に豊かに成長することや、幼児と共に生徒自らも育つような保育教育の可能性を提唱した。そして、今回の新型コロナウイルスのようなパンデミックや気候変動の進展によって多発が予測される気候災害を鑑みると、日常生活を危機に陥れる非常事態に備えておくという必要性も想定され、必ずしも既

製品に全面的に依存しなくても済む生活技術としての「手作り」の間食について学ぶということにも独自の意義をも指摘した。

付　記

本研究は科学研究費補助金（基盤研究（C)、課題番号：20K02323 及び 16K007470001：研究代表者：冬木春子）の研究成果の一部である。調査にご協力頂きました保護者の方々には感謝申し上げます。

注

1）「幼児の間食」についての実態調査は山田（2016）、桧垣（2017）が明らかしている。
2）母親の年齢及び就業形態について、未回答を分析対象から除外して算出している。
3）冬木・佐野（2019）において、幼児の食生活において「母親の多重役割仮説」が支持されなかったが、本調査における幼児の間食においても同様の結果となった。

文献

冬木春子, 佐野千夏 2019「母親の就労が幼児の生活習慣に及ぼす影響」日本家政学会誌 Vol.70, No.8, 512-521.
桧垣淳子 2017「幼児期の間食における保護者の意識と現状」中村学園大学研究紀要 No49, 35-39.
伊藤純 2008「福祉環境の変化、生活の社会化と消費」伊藤セツ, 川島美穂共編著『三訂 消費生活経済学』光生館, 126.
日経産業消費研究所 2006「高まる内食の改善志向」『食の健康・手作り志向を探る』日本経済新聞社, 7-9.
大浦祐二, 玉木志穂 2018「野菜の簡便化商品に関する販売実態と展開方向」野菜情報 https://vegetable.alic.go.jp/yasaijoho/senmon/1802/chosa02.html（2020 年 8 月 21 日取得）
表真美 2012「家事科 ・家庭科における間食に関する教育の変遷：ジェンダーの視点から」京都女子大学発達教育学部紀要 No.8, 1-8.
大竹美登利ほか 73 名 2019『技術・家庭（家庭分野）』開隆堂
佐藤康一郎 2017「食品産業の変化と大学生の食」外山紀子, 長谷川智子, 佐藤康一郎編著『若者たちの食卓　自己、家族、格差、そして社会』ナカニシヤ出版, 101.
佐藤文子、金子加代子ほか 59 名 2012『新しい技術・家庭　家庭分野』東京書籍
佐藤文子、金子加代子ほか 63 名 2019『新編　新しい技術・家庭　家庭分野　自立と共生を目指して』東京書籍
汐見稔幸ほか 32 名 2012『技術・家庭　家庭分野』教育図書
汐見稔幸ほか 31 名 2019『新技術・家庭　家庭分野』教育図書
田口楓 2019「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた年中行事に関する保育実践-お月見行事に焦点を当てて-」静岡大学教育学部家庭科教育専修卒業論文
鶴田敦子ほか 62 名 2012『技術・家庭（家庭分野）』開隆堂
山田さつき, 山川正信 2016「食事・おやつの与え方と食習慣から　幼児の食育を考える」New Food Industry, Vol.58, No.2, 17-22.